

「社会に貢献」が 会社のスタンス



株式会社
秋田屋本店

所在地/岐阜市加納富士町1-1
TEL/058-272-1221

事業内容/養蜂全般（蜜蜂生産物
製造・販売、養蜂資材
製造・販売ほか）

代表取締役社長

中村 正氏

■ 秋田杉を扱っていたので 「秋田屋」

——文化元年創業、200年を超える歴史を誇りますが、振り返ってみてどんな道のりでしたか？

中村 最初は材木商だったんですね。その中でも秋田杉を扱っていたので、「秋田屋」という屋号を使っているわけです。べつに秋田県出身ではないですよ。もともと材木屋をやっていて、それで巣箱をつくったことがきっかけで、養蜂の方に入って行って、本業になったという

のがルーツになります。

私で9代目、本当はもっと早く襲名（代々襲名している）するべきだったのですが、免許証やらパスポートやら書類関係を揃えるのが大変なもので、先代が亡くなってもう14、5年になるのですが、まだ襲名はしていません。そうしている間に、こっちが還暦を過ぎまして、同期の方などはもう定年退職していますので、はやく襲名をしなければと思っています。

養蜂業というのはもともと日本蜜蜂という在来種をつかっていたので、昔はとても貴重なも

のだったのです。中国の漢方にも出てきますし、日本でも江戸時代なんかとても貴重だったわけです。その後明治になりまして、文明開化、西洋のものを取り入れるということで、産業としての養蜂が日本にも紹介されて、そこから日本における近代養蜂がスタートしたわけです。この特徴は西洋の蜜蜂を使うことなんです。イタリア南部原産の西洋蜜蜂を導入して、それを家畜として飼育するという近代養蜂のスタートが明治の中頃になります。

■ 近代養蜂の発祥は岐阜

——岐阜が近代養蜂発祥の地といわれていますが？

中村 そうです。近代養蜂の中心的な役割を果たしてきたのが岐阜なのです。岐阜公園のところに名和昆虫博物館がありますが、昔そちらの先生が昆虫の一つとして西洋蜜蜂を研究されていました。当時は会社が本町1丁目、稲葉神社の近くで、博物館と近かったものですから、養蜂を紹介されて、様々な研究を進めました。

飼育する場合、もちろん箱がいるのですね。それに南方原産ですから日本で飼う場合、耐寒性が必要になります。また女王蜂は仕事が産卵ですが、多産系のものをつくることも必要になるので、そういう研究も重要です。日本は南北に長いわけですが、一番南からスタートして、北に移動していくというのが基本です。その場合箱がしっかりしていないとダメ。いま定置養蜂といいまして、1か所に蜂を置いて、そして蜜が入ってくるとどんどん箱を積んでいくというやり方をしているところが多いですね。蜂は花を求め移動して最終的に北海道に行く。そうしたことに耐えられる耐久性が必要になります。人間の場合はコンクリートの中でも生活はできますけど、湿度とか温度に影響を受けるのです。というわけで箱は木でなければまずいということです。その中でも日本で西洋蜜蜂を飼育するには杉材が一番適しているのです。それも赤みの秋田杉が一番いい。

あと岐阜県の花がレンゲでしょ。そしてレンゲの蜂蜜はおいしいといわれます。一番いい値段がついて、蜂蜜の王様がレンゲなわけです。かつてレンゲがたくさんあるので、全国から岐阜に集結してきたのです。昔は車で移動しましたので、岐阜は地理的にも全国のちょうど中間にあって具合が良かった。いまは輸入ものが多いですが、国産しかなかった時代は、近代養蜂の発祥の地が岐阜だというわけです。

■ 採れないときはサポートも

——各養蜂業者との連携は？

中村 わたしどもの会社はあくまで「問屋」という位置づけです。問屋というと卸業務というような意味合いが強いのですが、江戸時代とか明治時代の問屋というのは生産者に対する問屋ということになり、漁業でいうと、網元ということです。各養蜂業者に対して資材を提供して、そして蜂蜜を仕入れて売るといった形が基本になります。

蜂は生き物ですから、雨が降ると働かないんです。農作物の何倍も豊凶の差が激しいので、蜜が取れない年もありますから、サポートしていくということも仕事になります。問屋と生産者というのは、地主と小作ほどではないですが、漁師と網元のような関係だったのです。それが伝統的に現在まで続いているということです。ただ今はなかなかそういう形100%で経営していけませんから、柱は養蜂ですけど、関連業務もやらせていただいているところです。つまり健康食品とか医薬品、あと容器とか器材とか。まあ時代の変化にうまく対応できたので、企業が存続しているのだと思います。

——蜂の管理において気を付けている点は？

中村 蜂蜜はいま輸入で安くなっていますけど、昔は高価なもので、医薬品として扱っていました。値段も10倍くらい差があり、まさにピンからキリまであります。産地偽装の問題



も常にあって、よく新聞なんかでも書かれています。その点私どもは、正しく品質検査を実施し、生産履歴も徹底しています。川上から川下まできちっとやっているわけです。安心安全していただけるような信用を得ることを重視して、その点は古くから念頭に置いています。

箱の製造では同業者が岐阜に多いのですが、巣礎でいうとウチのシェアは国産では70%くらいでしょうか。巣礎の製造というのはマイナーな業界ですけど、世界中にあって一番大事なのです。蜂を増やすにはやはり巣礎が基本になります。

あと蜂の仕事として生産物としての蜂蜜もちろん大事ですけど、花粉の交配も重要です。いちごとかメロンとかみんな蜂が交配するのです。岐阜には濃姫といういちごがありますが、これも蜜蜂が交配するのです。ただし農薬の問題もありまして、アメリカはオレンジとかレモン、グレープフルーツなど柑橘類を生産していますが、ヘリコプターで農薬をまくので昆虫が全部死んでしまうのです。ちょうど高橋直子さんがトレーニングしたカナダの高地で蜂をどんどんつくるのですが、農薬が収まったところで、蜂をもっていくという工夫が必要になります。人間より蜂の方が弱いですから、人間が大丈夫でも蜂が先に死んじゃう。ゴルフ場では農薬がありますと蜂が全滅しちゃうんです。人間は鈍

感だからわからないけど、蜂は弱いです。

蜂は何万年も進化していないのです。普通は進化しますね。進化するというのは変化に対応するためなのですが、蜜蜂は進化も退化もしていません。どうしてかという、プロポリスがあったので、進化する必要がなかったのです。恐竜なんかは変化に対応できなくて、絶滅しましたが。

■ 養蜂の暗黒時代も

—— 病気もあるのでしょうか？

中村 蜂は農薬、病気に弱い。病気というのは菌の伝染病で、感染すると幼虫がドロドロになってしまう怖い病気です。昭和27年か28年くらいに日本に入ってきました、一気に広まったことがありました。これが養蜂の暗黒時代といいましょうか。蜜蜂がいない時期がありまして、輸入されてこなかった。

病気に関しては養蜂振興法というのが審議され、昭和30年にできました。マイナーな業界なのでそんなものは必要ないという話もありましたが、届出義務も制度化されました。さきほども触れましたが、花粉の交配ということも含めると蜂はものすごく農業に貢献しているわけです。もし病気になったら、家畜衛生保険所で検査する。病気が見つかったら、丸ごと焼却し

ます。長良川河畔で燃やしたこともあるのですが、毎日係わってきたかわいいものですから、かなりの苦痛を味わった。というわけで「蜜蜂の碑」というのが、昭和35年に護国神社のところに設けられたのです。毎年11月23日の勤労感謝の日に供養しています。蜜蜂は勤労のシンボルですから。

いずれにしても病気は怖くて、あとダニも怖いんです。抗生物質を使うこともあります。蜂蜜に残留するので、基本的には使ってはいけません。蜂は寒さには強い方ですけど、暑いのは弱いです。扇風機をつかってなるべく一定の温度に保つように工夫したりしています。ほかの家畜と違うところは、牛でも馬でも鶏でも毎日餌をあげて、糞の処理もありますよね。蜂の場合、飼育は結構難しいのですが、毎日餌をやる必要はありませんし、糞も外でしかしませんから巣箱の中は清潔です。手間がかからない分、温度管理とか難しい。場合によっては全滅してしまう。だから趣味として飼う場合は2回、3回は失敗してしましますが、それにめげずに研究しようという人は養蜂家として残っていきます。

■ 80%が医薬品向け

——いまは医薬品向けが多いのでしょうか？

中村 医薬品向け80%、食品向け20%の割合です。いまは企業向けの販売が中心ですが、今後は一般消費者向けにも力を入れたいです。無農薬とか有機というのは現在消費者のニーズがありますから。通販関連では展開していますが、宣伝力もいりませぬなかなか難しいですね。対企業においては品質検査や信用が必要で、そういうところは昔から強いですが。

蜂蜜はヨーロッパでは一般食品として、料理にふんだんに使いますが、日本では健康食品とか薬というイメージになります。使用量は先進国の中では一番少なく、年間使用量ではドイツは日本の7、8倍ありますから。イ

タリア料理やフランス料理にはよく使われますし、生産も消費も多いのです。

日本では南米とかオーストラリアとかニュージーランド、カナダとか世界中から輸入していましたが、最近は中国が近いし、安いしということで、一極集中してきています。中国は「一人っ子政策」で子供が大切にされるためか、栄養価の高い蜂蜜の消費がぐんと伸びています。今後はミャンマーとかアフリカ産が出てくるでしょうね。それにしても輸入品をブレンドしたりすると偽装になりますし、新聞にもかつて出ていましたが、蜂蜜は常に産地の偽装と他の糖を混ぜる偽和物という二つの課題を抱えています。

ところでロイヤルゼリーは認知症とか脳に働くのです。老化というより、若返るといって、元に戻るといって脳に作用いたします。プロポリスは殺菌力とかウイルスという免疫力に作用しますので、さらに研究を進めています。もともとプロテクトー守る、ポリスー警察という意味ですから。しかし医薬品として認可しようとすると、臨床実験などで桁違いのお金がかかるので、私どもとしては基礎的な研究することになります。

いま全体の70%くらいは趣味の養蜂といわれています。西洋蜜蜂はとる力が強いので養蜂には西洋蜜蜂を使うのですが、日本蜜蜂を趣味で



飼っている方も多くて、岐阜県にも結構います。岐阜県で業として養蜂をやっているのは現在 98 人です。

■ 品質管理・保証は徹底

——社員にいつも話していることは？

中村 いま正社員は 160 人くらい。夏の臨時社員も入れると 350 人くらいですか。とくに 6 月からお盆までは連続操業になって休日なしという感じです。人集めが大変ですし、冬になると逆に人がいらなくなりますから。

社員にはルールとマナーを守って 1 銭のお客さんも 100 万円のお客さんも同じ目線で対応していくということを話します。人の健康に寄与する仕事で、蜜蜂は社会性の高いものですから、会社のスタンスも「社会に貢献できる」という

ことになります。ウチは品質管理・保証体制がしっかりしていて、常に薬剤師、研究員とかスタッフを置いて、管理しています。

最後になりますが、「公益財団法人みつばちの家」というのがあって、その理事長をやらせてもらっております。青少年に勤労とか平和とか友愛とかのコンセプトで、教育にも寄与しているところです。

